

## 「貨幣の資本への転化」と労賃範疇

坂 脇 昭 吉

### „Die Verwandlung von Geld in Kapital“ und die Arbeitslohn-Kategorie

Akiyoshi SAKAWAKI

#### I

周知のようにマルクスは、『資本論』第1部「資本の生産過程」、第2篇「貨幣の資本への転化」のところにおいて、「商品や価値や貨幣や流通そのものの性質についての以前に展開されたすべての法則に矛盾している」<sup>1)</sup> ところの「剰余価値の形成、したがって…貨幣の資本への転化」<sup>2)</sup> を説くにあたって、しかしながらやはり、「等価物どうしの交換が当然出発点とみなされる」<sup>3)</sup> ところの「商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきである」<sup>4)</sup> とした。そしてマルクスは、その「資本の一般的範式の矛盾」の解決のために、「現実の消費そのものが労働の対象化であり、したがって価値創造であるような1商品……労働能力または労働力 (das Arbeitsvermögen oder die Arbeitskraft)<sup>5)</sup> を導入したのである。

マルクスのこうした方法に対して宇野弘蔵氏は次のような疑問を提起した。すなわち、第2篇「貨幣の資本への転化」について、「この篇は商品、貨幣の場合とは説き方が異ってきている。……むしろここでは『資本の一般的定式』と、その『矛盾』、その矛盾の解決としての『労働力の売買』として、『定式』を中心に説いてある。それは形態規定としてもやや異なったものを感じるのである。……商品、貨幣の場合と異なって、一般的に資本の規定にはそういう歴史的形態に対応した理論的展開が必要になるのではないか」<sup>6)</sup>。このように、マルクスが「商品と貨幣」のところでも展開した方法であるいわゆる発生史的な意味における歴史的展開と論理的展開との照応関係が、「貨幣の資本への転化」のところでは不十分である、と言うのである。そして「『資本論』はこの《貨幣の資本への転化》を明確に商品・貨幣に続く形態規定として十分には展開しえなかったのである」<sup>7)</sup> と断言する。

以上のような宇野氏の問題提起をめぐって、マルクスの方法こそが正しいとして『資本論』を擁護する立場<sup>8)</sup> からの反論や、あるいは宇野氏の説をより「厳密」にし、補強しようとする試み<sup>9)</sup> 等々数多くの議論がくり返えされてきた<sup>10)</sup>。そしてそれは今だ完全に結着がついたとは言い難い問題として『資本論』研究の重要な対立点になっているのである。なぜなら、この「貨幣の資本への転化」の論理展開の方法をどう理解するかは、『資本論』全体の論理構成の展開自体をどう理解す

るのか、という問題を、ある意味では決定づける問題でもあるからである。より根本的には、この問題は、マルクスの経済学の方法としての論理と歴史の問題を、どう理解するのかについての基本的な内容そのものをなすからである。

そこで私はこの小稿において、こうした「貨幣の資本への転化」をめぐる論議を念頭に置きながらも、これまで若干等閑視されてきたと思われる労賃範疇を、貨幣の資本への転化との関連で捉えなおしてみようと思うのである。すなわち、「貨幣の資本への転化」を解くにあたってマルクスが導入した労働力商品を単に歴史的範疇としてのみ捉えるのではなく、論理範疇としても捉えなおしてみることによって、「貨幣の資本への転化」の問題を別な角度からもながめてみようと思うのである。

- 1) Marx, K., *Das Kapital*, 1867, Bd. I, *Werke*, Bd. 23, 1962, S. 170. 訳, マル=エン全集刊行委員会訳『資本論』, 第1巻第1分冊, 1967, 大月書店, 203~204 ページ。以下, *Das Kapital*, I, S. 170. 訳〔1〕-a, 203~204ページというふう略す。
- 2) *Das Kapital*, I, S. 175. 訳〔1〕-a, 211ページ。
- 3) *Das Kapital*, I, S. 180~181. 訳〔1〕-a, 217ページ。
- 4) *Das Kapital*, I, S. 180. 訳〔1〕-a, 217ページ。
- 5) *Das Kapital*, I, S. 181. 訳〔1〕-a, 219ページ。
- 6) 宇野弘蔵『宇野弘蔵著作集』, 第6巻, 171ページ, 岩波書店, 1974年3月, 源出『資本論入門』, 創元文庫。こうした点について氏は別なところでも次のように述べている。「資本の産業資本的形式は, 商人資本的形式や金貸資本的形式と異って, 資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない。この形式のいはば基軸をなす労働力の商品化は流通形態自身から出るものではないからである。……労働力の商品化の基礎をなす, 生産手段を失った無産労働者の大規模的出現は, 資本主義に先きだつ封建的社会自身の崩壊によるものであって, いわゆる単純なる商品生産者としての小生産者が, 商品経済によって分解されて生ずるというようなものではない。……小生産者の分解は, どこまでも, またいつでも近代的無産労働者を出現せしめるとは限らない」(同『経済原論』, 44ページ, 岩波全書, 1964年5月)。
- 7) 同『経済学方法論』, 316ページ, 東大出版会, 『経済学大系, I』, 1962年2月。この点に関して氏はより詳しく次のように述べている。「論理的にも『貨幣の資本への転化』は,  $G-W-G'$  の商人資本的形式から,  $G\cdots G'$  の金貸資本的形式を経て  $G-W\cdots P\cdots W'-G'$  の産業資本的形式を展開するものとしなければならない」(同上)。
- 8) ひとまず次のものをあげておこう。見田石介『宇野理論とマルクス主義経済学』(青木書店, 1968年8月), 見田石介・横山正彦・林直道編著『マルクス主義経済学の擁護』(新日本出版社, 1971年12月)。さらには, 立場は違いが佐藤金三郎『「資本論」と宇野経済学』(新評論, 1968年11月), 毛利明子『資本論の転化論』(法政大学出版会, 1976年1月)がある。なお, 最近の論文としては, 宮下柁次「『貨幣の資本への転化』論(上),(下)」(札幌商大, 短大『論集』, 15号, 16号, 1975年, 1976年), 吉田 紘「貨幣の資本への転化」(東北大『研究年報, 経済学』, Vol. 37, No. 2, 1975年)などが有益である。
- 9) さしあたりは, 降旗節雄『資本論体系の研究』(青木書店, 1965年9月), 鎌倉孝夫『経済学方法論序説』(弘文堂, 1974年4月)の研究をあげておこう。
- 10) この論争を詳しく紹介していて有益な論文に, 姫野教善「『貨幣の資本への転化』に関する一考察(1)~(5)」(北九州大学『商経論集』所収, 1970年1月~1972年3月)がある。

## II

ところでマルクスは, 貨幣の資本への転化を論じるなかで, それとの関連においてまず, 資本の

生成と労働力商品の創出との関連について次のように明らかにしていた。すなわち、貨幣が資本へ転化するためにはまず、「貨幣所持者は商品市場で自由な労働者に会わなければならない」<sup>11)</sup>が、その自由な労働者と貨幣所持者との出会いは、「自然史的な関係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的な関係でもない。それは、明らかに、それ自体が、先行の歴史的発展の結果なのであり、多くの経済的変革の産物、たくさんの過去の社会的生産構成体の没落の産物なのである」<sup>12)</sup>と。ここに資本の生成の歴史的独自性がある。

ところが、資本の基礎形態である商品や貨幣の「一般的諸範疇」の場合は、それ自体としては一応「歴史的な痕跡を帯びてい」<sup>13)</sup>た。例えば商品が出現するためには、すなわち生産物が商品として現われるためには、「社会内の分業がかなり発展して、最初は直接的物々交換に始まる使用価値と交換価値との分離がすでに実現されていることを条件とする。しかしこのような発展段階は、歴史的に非常に違ったいろいろな経済的社会構成体に共通なものであった」<sup>14)</sup>。さらに貨幣についても、それは「商品交換のある程度の高さを前提する」<sup>15)</sup> といえ、「種々の特殊な貨幣形態……が形成されるためには、経験の示すところでは、商通流通の比較的わずかな発達で十分であ」<sup>16)</sup>った。ところが、資本それ自体は決してそのようなさまざまな発展段階において発生しうるのでなく、それは「生産手段や生活手段の所持者が市場で自分の労働力の売り手としての自由な労働者に会おうときにはじめて発生するのであり」<sup>17)</sup>、マルクスはこのことを称して、「この1つの歴史的條件が1つの世界史を包括しているのである。それだから、資本は、はじめから社会的生産過程の1時代を告げ知らせているのである」<sup>18)</sup> と述べていた。

このように資本制的生産関係を創り出す過程は、明らかのように1つの歴史的過程であって、同時にそれは直接生産者から彼らの生産手段を分離させる過程であって、彼らを賃銀労働者に転化させる過程にほかならなかった。それゆえ「いわゆる本源的蓄積は、生産者と生産手段との歴史的分離過程 (der historische Scheidungsprozeß) にほかならないのである」<sup>19)</sup>。

次に、こうして創り出された労働力商品が何故剰余価値を形成しうることについて、マルクスは次のように明らかにしていた。すなわち、まず以上のような歴史的な過程を通して生まれたところの労働力商品は、その創出の過程で次のような2つの意味での自由な性質を付与されていた。「自由な人として自分の労働力を自分の商品として処分できるという意味と、他方では労働力のほかには商品として売るものをもっていなくて、自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解放されており、すべての物から自由である」<sup>20)</sup>。つまり、全ての身分的拘束から解放されていると同時に、生産手段を奪われていることによって他人に自らの労働力を売る以外に生きてゆくすべがない、という点である。こうして生産手段を奪われた労働者と、生産手段を私有し得た資本家とが必然的に結合することになるのであって、労働者は資本家の監督のもとで生産を行うことになる。ところが他方で、労働力商品とは「価値の源泉であるという独特な性質をその使用価値そのものがもっているような1商品……、つまりその現実の消費そのものが労働の対象化であり、したがって価値創造 (Wertschöpfung) であるような1商品」<sup>21)</sup> でもあった。こうした特質をもった

労働力商品が、商品交換の法則にもとづいて資本家と対応する。「資本家は、労働力のたとえば1日分の価値を支払う。そこで労働力の使用は、他のどの商品の使用とも同じに、……彼が資本家の作業場にはいった瞬間から、彼の労働力の使用価値、つまりその使用、労働は、資本家のものになったのである」<sup>22)</sup>。そこで資本家は第1に商品を生産しようとする。第2に彼は当然のごとく彼が生産に当って支出した「生産手段と労働力との価値総額よりも高いことを欲する」<sup>23)</sup>。こうして資本家は使用価値としての商品だけを生産しようというのではなく、「価値を、そしてただ価値だけでなく剰余価値 (Mehrwert) をも生産しようとするのである」<sup>24)</sup>。こうした資本家の意図と願望は次のような事情によって達成されることになる。すなわち、先にもみたように、まず資本家は労働者に労働力の日価値を支払っている。だから1日の労働力についての使用は資本家のものである。それ故、「労働力はまる1日活動し労働することができるにもかかわらず、労働力の1日の維持には半労働日しかかからない……、したがって、労働力の使用が1日につくりだす価値が労働力自身の日価値の2倍だという事情は、買い手にとっての特別な幸運ではあるが、けっして売り手に対する不法ではないのである」<sup>25)</sup>。

しかも、例えば「宝石細工労働者がただ彼自身の労働力の価値を補填するだけの労働部分は、彼が剰余価値をつくりだす追加的労働部分から、質的には少しも区別されないのである。相変らず剰余価値はただ労働の量的超過 (quantitativen Überschuss) だけによって、同じ労働過程の、すなわち……宝石生産の過程の、延長された継続だけによって、出てくるのである」<sup>26)</sup>。

以上のようにマルクスは、資本主義社会の経済的運動法則の基本としての剰余価値の形成、すなわち貨幣の資本への転化の内実が、歴史的過程において創り出された労働力という商品の特質に起因していることを明らかにした。この点をとらえて、一般には、『資本論』における「貨幣の資本への転化」の展開方法を批判する側も、マルクスの方法を擁護しようとする側も共に、労働力商品が歴史的な産物として創り出されたが故に、貨幣の資本への転化をマルクスは歴史的要因を導入することによって、あるいは、資本の生成それ自身が歴史的過程そのものだと説明しているとの認識に立っている場合が多い<sup>27)</sup>。しかしながらマルクスは、貨幣の資本への転化の論理を、いな資本制的生産様式の生成と確立それ自体を基本的に支える労働力商品範疇を、単に歴史的産物として、歴史的範疇としてのみ捉えているのだろうか。歴史的範疇として捉えることの重要性和同時に、他方で、労働力商品が歴史的に創り出されてきたその過程をも含めて、マルクスが展開した労働力商品それ自体の論理的範疇としての意義についてもまた省りみる事が重要ではないだろうか。

11) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳[1]-a, 221ページ。

12) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳[1]-a, 222ページ。

13) *Ebenda*.

14) *Das Kapital*, I, S. 184. 訳[1]-a, 222ページ。

15) *Ebenda*.

16) *Das Kapital*, I, S. 184. 訳[1]-a, 222~223ページ。

17) *Ebenda*.

- 18) *Ebenda.*
- 19) *Das Kapital*, I, S. 742. 訳〔1〕-b, 934ページ。
- 20) *Das Kapital*, I, S. 183. 訳〔1〕-a, 221ページ。
- 21) *Das Kapital*, I, S. 181. 訳〔1〕-a, 219ページ。
- 22) *Das Kapital*, I, S. 200. 訳〔1〕-a, 243ページ。
- 23) *Das Kapital*, I, S. 201. 訳〔1〕-a, 245ページ。
- 24) *Ebenda.*
- 25) *Das Kapital*, I, S. 208. 訳〔1〕-a, 254ページ。
- 26) *Das Kapital*, I, S. 212. 訳〔1〕-a, 259ページ。
- 27) 宇野弘蔵氏の見解についてはすでに先に示したように自明だが、例えば佐藤金三郎氏もこの点に関して次のように述べている。「『資本論』では、マルクスは『貨幣の資本への転化』の謎—いわゆる『一般的定式の矛盾』—を商品、貨幣の場合と異なり、貨幣から資本を『単純に「演繹」する』ことによってではなく、歴史的与件としての労働力商品を導入することによって、いかえれば『研究の領域に歴史的条件をひき入れる』ことによって解決したのである」（同、前掲『『資本論』と宇野経済学』、186ページ）。なお、佐藤氏の宇野理論批判に関するコメントとしては飯田裕康氏の佐藤前掲書の書評が有益である（慶応義塾『三田学会雑誌』62巻4号、1964年4月）。

### III

さて、なるほど労働力商品は歴史的な過程の中から創出されたことは確かなのだが、そのことの本質的意義は、実は次の点に見い出されねばならないであろう。労働力商品を創出する過程、すなわちいわゆる「本源的蓄積過程」は、「多人数の矮小所有の少数人の大量所有への転化、したがってまた民衆の大群からの土地や生活手段や労働用具の収奪（Expropriation）、この恐ろしい重苦しい民衆収奪<sup>28)</sup>の過程であった。そしてこの「資本の前史」<sup>29)</sup>、すなわち「賃金労働者とともに資本家を生み出す発展の出発点は、労働者の隷属状態だった」<sup>30)</sup>のである。こうして明らかなように資本主義社会の創出とは「封建的搾取（Exploitation）の資本主義的搾取への転化」<sup>31)</sup>にほかならなかったのである。この過程において労働者から生産手段が奪い去られることになるのであって、労働者は資本家のもとで働かざるを得ないという宿命を負わされるのである。こうした意味において資本主義社会は、資本家と労働者との階級的対立関係によって基本的に貫かれているのである。

明らかなようにこのことだけでは直ちに、貨幣を資本へ具体的に転化させるものとしての資本制的搾取の論理を理論的に十分説明し得たことにはならない。こうした歴史的條件、それは資本制的生産様式的前提であり、出発であり、基礎をなすのであって、資本主義社会が資本主義社会として成立するためには、一方に商品や貨幣の流通が、資本制的生産様式を可能にするまでに発達していることが同時にまた必要なのである。すなわち、資本と賃労働という階級関係と、商品・貨幣の流通といういわゆる交換関係とが、生産関係としての階級関係が先行するなかで結合することが、資本制生産様式の核心として資本制的搾取を可能にするのである。そしてこうした結合を現実可能にし、資本制生産様式をその蓄積、循環過程としての再生産様式において支えているもの、それが実は労働範疇そのものなのである。労働範疇こそは、資本主義に先行する、あるいは範疇的には資

本主義社会をその表象において表現するものとしての貨幣範疇を受け継ぎ、更には労働力商品の階級の本質を體現している範疇として、資本主義社会の存立にとってきわめて重要な存在なのである。しかも労賃それ自体は、一方では支払制度として具体的に、資本主義社会の発達の中で労賃支払制度として確立していったという歴史的性質を持ち、他方で範疇としての労賃は、後に述べるようにまさに剰余価値そのものを隠蔽し、範疇としての利潤概念を生み出すという論理上の役割を果している<sup>32)</sup>のである。こうして、それは、資本制的搾取そのものを成り立たせる上での基本的役割を担い、さらにより具体的な問題としても労賃は、利潤とは決して相入れることのない敵対概念<sup>33)</sup>として、『資本論』の基軸的な存在をもなしているのである。

すなわちマルクスは、労賃 (Arbeitslohn) 範疇について以下のような2つの性質を明らかにしていた。1つは、周知のように『資本論』第1部第6篇の「労賃」のところで明確に規定したいわゆる剰余価値、及び剰余労働を隠蔽する役割としての労賃範疇である。すなわちマルクスは言う。「ブルジョア社会の表面では、労働者の賃金は労働の価格として、すなわち一定量の労働に支払われる一定量の貨幣として、現われる」<sup>34)</sup>。それゆえ労賃という形態は、「労働日が必要労働と剰余労働とに分かれ、支払労働と不払い労働とに分かれることのいっさいの痕跡を消し去るのである」<sup>35)</sup>と。

もう1つの労賃範疇の性質は、再生産過程の中で果す支払制度の内実としての労賃であり、資本制的搾取の生成と、それを基礎とした資本制的経済の蓄積、循環に果す役割である。すなわち、先にも少し触れたように、「貨幣の資本への転化」に際して労働力商品の特質が果す役割は、まず階級関係に規定されながら、生産手段を持たない労働者が資本家の監督のもとで剰余価値を創出せざるを得ない、ということであった。同時にそのことは、労働者が自らの労働力と引き換えに手にする貨幣すなわち賃銀が、実は資本家の手元に剰余価値を確実にもたらす制度的保証の役割を果しているという点である。すなわち、労働者は自ら手に入れた賃銀によって必ずや自らの生活手段を市場で購入せねばならないのであって、そのことによって、実は、生産と消費の分離が生じ、それはまた資本制的経済の循環を促進し、同時に、利潤の制度的保証を資本家に与えることになるのである。こうした労賃範疇の規定をふまえて、次に搾取論としての貨幣の資本への転化と労賃範疇との関連を明らかにしておこう。

28) *Das Kapital*, I, S. 789~790. 訳[1]-b, 994ページ。

29) *Das Kapital*, I, S. 790. 訳[1]-b, 994ページ。

30) *Das Kapital*, I, S. 743. 訳[1]-b, 935ページ。

31) *Ebenda*.

32) この点に関してマルクスは、『資本論』第3部「資本制的生産の総過程」第1篇「剰余価値の利潤への転化と剰余価値率への転化」第1章「費用価格と利潤」のところで次のように明記している。「一方の極で労働力の価格が労賃という転化形態で現われるので、反対の極で剰余価値が利潤という転化形態で現われるのである」(*Das Kapital*, III, S. 46. 訳[III]-a, 45ページ)。

33) マルクスは『賃労働と資本』の中で次のように述べている。「賃金と利潤は反比例 (umgekehrten Verhältnis) する。資本の交換価値すなわち利潤は、労働の交換価値すなわち1日の賃金が下がるのに比

例して上がり、また逆の場合は逆である。利潤は、賃銀が下がるだけ上がり、賃金が上るだけ下がる」(Marx, K., *Lohnarbeit und Kapital*, 1849, *Werke*, Bd. 6, S. 414. 訳, マル=エン全集刊行委員会訳「賃労働と資本」, 『マル=エン全集』, 第6巻所収, 410ページ。以下, 訳については, [6], 410ページというふうに略す)。別なところでもマルクスは次のように述べている。「労働者の物質的生活がどれほど改善されようとも, 労働者の利益とブルジョアの利益すなわち資本家の利益との対立がなくなることはない。利潤と賃金は依然として反比例する」(Marx, K., a. a. O., *Werke*, 6, S. 416. 訳 [6], 411~412ページ)。なお, こうした点と労働運動の必然性との関連については, 拙稿「社会政策と階級対立, 上, 下」(『鹿児島大学教育学部紀要』, 社会科学篇, 第25巻及び第26巻, 1974年3月及び, 1975年3月)を参照されたい。

34) *Das Kapital*, I, S. 557. 訳[1]-b, 693ページ。

35) *Das Kapital*, I, S. 562. 訳[1]-b, 669ページ。なお, こうした点に関する私見については拙共著『マルクス経済学』, 48ページ(学文社, 1976年4月), および拙稿「労働力の価値・価格の労賃への転化について」(『千里山経済学』第3号, 関西大学大学院, 1969年12月)を参照されたい。

#### IV

マルクスは『資本論』第2篇「貨幣の資本への転化」のところで次のように述べていた。「資本主義時代を特徴づけるものは, 労働力が労働者自身にとって彼のもっている商品という形態をとっており, したがって彼の労働が賃労働(Lohnarbeit)という形態をとっているということである」<sup>36)</sup>(傍点筆者)。すなわち, 資本主義社会と他の社会を区別する重要な基準は, 労働力が商品となり, その労働力商品が賃銀労働の形態をとっていることだとマルクスは言う。このように労働力商品が労賃範疇によって体现せられていることを「貨幣の資本への転化」の問題で議論されることは今日までほとんどなかったであろう。この点について今少しマルクスの表現に基づいて考えてみよう。

ところで, 生産過程そのものが資本主義的な生産過程へと移行するためには, 具体的には次のような過程を経ることになる。「いままで独立に自分自身のために生産していた農民が, 1人の借地農のために労働する日傭取りになったとする。また同職組合的生産様式の中で行なわれた階位的構成が, 手工業者を賃銀労働者として自分自身のために労働させる資本家の単純な対立の姿の前に消滅したとする。またいままで奴隷所有者であったものが, これまでの奴隷を賃銀労働者として使用する, 等々になったとする, そうすると, 社会的に異なって規定された生産過程が資本の生産過程に転化される」<sup>37)</sup>(傍点筆者)。こうして資本の生産過程は, 資本家の監督の下に労働者が剰余労働を与儀なくされる過程になるのだが, この場合, 資本家と労働者が生産過程を前に対応した際「労働者がまず自分の労働と交換に受け取るものは一定額の貨幣(Geldes)である」<sup>38)</sup>。この点がまず理論上の問題としては第1の出発として重要である。すなわちマルクスは言う。「賃銀労働は資本形成に必然的な条件であり, 資本主義的生産にとって常に必然的な前提である。それ故に, 第1の過程, すなわち, 貨幣と労働能力との交換または労働能力の売却は, それ自体直接的生産過程にはいらないにも拘わらず, これと反対に, それは全関係の生産に入るのである」<sup>39)</sup>(傍点筆者)。このように資本は, その生成の出発においても賃銀労働を前提にし, 賃銀労働もまた資本を前提とするのである<sup>40)</sup>。そして具体的に実際の生産過程の中では, 剰余価値それ自身が, 「剰余生産物として, ……」

労働賃銀の価値に等しい価値をもつ量を超過する……量となって現われる。従って労働過程が価値増殖過程として現われるのは、……この過程において附加される具体的労働……量が労働賃銀に含まれたもの以上の追加量を表わすということによってである<sup>41)</sup>ということになる。そこでさらに重要なのは、生産手段を失った労働者が、自らの生活のために労働力を資本家に売ることによって、その代価として得る貨幣でもって実は、自らの生活手段を買い戻さなければならないという賃銀支払制度の持つ本質的側面である。こうしたことをとおして、労働者が生産過程で生み出した剰余価値を、資本家は無償で手に入れることができるのである。なぜなら全ての生産物は市場で貨幣と交換されねばならないのであって、ことによってはじめて、剰余価値もまた資本家のものになり得るのである。つまり、「資本家階級は労働者階級に、後者によって生産されて前者によって取得される生産物の1部分を指示する証文を、絶えず貨幣形態で与える。この証文を労働者は同様に絶えず資本家階級に返し、これによって、彼自身の生産物のうちの彼自身のものになる部分を資本家階級から引き取<sup>42)</sup>らねばならないのである。ここに労賃支払制度というものが、労賃範疇をして単に剰余価値の隠蔽という問題だけではなく、実際の資本の生産活動にとって、重要な役割を果していることを認識せねばならないであろう。このように「資本主義的生産過程の不断の結果としての労働能力の売買は、労働者が絶えず彼自身の生産物の一部を彼の生きた労働で再び買い戻さなければならない<sup>43)</sup>」ということを必然化するものであって、労働力商品に対する代価が労賃すなわち貨幣によって支払われていることの決定的な重要さがここにある。マルクスは、貨幣の資本への転化をこうした再生産の視点からながめることの重要性について次のように述べている。「貨幣を資本に転化させるためには、商品生産と商品流通とが存在するだけでは足りなかった。……つまり、労働生産物と労働そのものとの分離、客体的な労働条件と主体的な労働力との分離が、資本主義的生産過程の事実に与えられた基礎であり出発点だったのである。ところが、はじめはただ出発点でしかなかったものが、過程の単なる連続、単純再生産によって、資本主義的生産の特有な結果として絶えず繰り返えし生産されて永久化されるのである。……生産過程は同時に資本家が労働力を消費する過程でもあるのだから、労働者の生産物は、絶えず商品に転化するだけではなく、資本に、すなわち価値を創造する力を搾取する価値に、人身を買う生活手段に、…転化するのである。それだから、……労働者を賃金労働者 (Lohnarbeiter) として、生産するのである。このような、労働者の不断の再生産または永久化 (Verewigung) が、資本主義的生産の不可欠の条件なのである<sup>44)</sup>。

このように資本の再生産の条件を作り出し、それを可能にする重要な範疇の1つが他ならぬ労賃範疇なのである。労賃範疇は、その本質上の性質からして、「つねに労働者の側からの一定量の不払労働の提供を条件とする<sup>45)</sup>」ことを内包し、その不払労働の体現としての剰余価値を労働者が自らの現実の生活上の消費過程を通して具体的に資本家のものとするのである。こうして貨幣の資本への転化は、再生産の過程の中で「絶えず繰り返して、……転化される<sup>46)</sup>」ことになる。マルクスは言う。「賃銀制 (Salarial) なしには剰余価値の生産はなく、剰余価値の生産なしには、資本主義的生産は成り立たない、……。貨幣は、労働者自身によって売られる商品としての労働能力と交換するこ



となしには、資本とはなり得ない<sup>47)</sup>と。単純に労働力商品の創出が歴史的過程の中から生じたという点をのみ捉えて、マルクスが貨幣の資本への転化を歴史的与件を導入することによって解決したとだけ言うことは、労働力商品の持つ歴史的意義(階級の本質)だけではなく、本来歴史的意義と結合させることによって、新たな範疇すなわち労賃範疇へ転化するものとしての労働力商品それ自体の重要な意義(剰余価値形成の特質)それ自身をも見失なわせてしまうことになるであろう。それは同時に労働力商品を現実の展開の中で体現している範疇としての、さらには、現物支払制度(truck system)を経由するという具体的な歴史過程の中から獲得された賃金支払い制度の範疇としての労賃の意義を、『資本論』の論理展開の中に正しく位置づけることをも不可能にしてしまうであろう<sup>48)</sup>。ちなみに、『資本論』におけるマルクスの論理的展開と歴史的展開との方法は、たんなる論理の純粋な展開でもなければ、また歴史事実そのもの説明を行っているのでもない。言うならば、歴史的実証に支えられながら、歴史的発展の道を凝縮した論理の展開として、すなわちカテゴリーの展開として叙述してゆくのである<sup>49)</sup>。そうした意味においてマルクスは、貨幣の資本への転化の論理を、すなわち資本制的搾取の論理を労働力商品の創出という歴史的事実とその商品の特質に支えられながら、それをカテゴリーの展開として、すなわち、労働力商品の論理範疇としての労賃という階級関係と交換関係の統一された範疇の導入と、その展開をとおして明らかにしているのである。最後に、労賃範疇の重要性についてのマルクスの言葉を紹介して、小稿の一応の結びとしよう。「賃銀労働、資本への労働の売却を、その故にまた賃銀生活者の形態を、資本主義的生産に外的なものと做見す人は誤りである。それは、資本主義的生産関係自身によって日々新たに生産される本質的な、それ自身の媒介形態である<sup>50)</sup>(傍点筆者)。

- 36) *Das Kapital*, I, S. 184. 訳[1]-a, 223 ページ。この点に関してマルクスは別なところでも次のように述べている。「労働を賃労働に転化させ生産手段を資本に転化させるということは、資本主義的生産様式の不断の傾向であり発展法則である」(*Das Kapital*, III, S. 892. 訳[III]-b, 1130ページ)。
- 37) Marx, K., Erstes Buch. Der Produktionsprozess des Kapital. Sechstes Kapitel. *Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*, 『マルクス=エンゲルス=アルヒーフ』第2巻, モスクワ, 1933年。向坂勉郎訳『『資本論』断片』、『資本論綱要』所収, 183ページ。岩波文庫, 1953年5月。(以下, マルクス, 前掲「諸結果」, 183ページというふうにも略す)。マルクスはまた労働者の創出過程について次のようにも述べている。「資本家と賃銀労働者の関係が、同職組合的親方とその職人及び徒弟の代りに現われることがあり得る。すなわち部分的には都会のマニュファクチュアラーがその生成に際して経過する通路である。中世的同職組合関係、類似の形態でアテネやローマにおいても狭い範囲内ではあるが発展し、そうして一方ではヨーロッパにおける資本家の形成にとって、他方では自由な労働者身分の形成にとって決定的に重要であったところの関係は、資本と賃金労働との関係の制限された不十分な形態である。ここにおいては、一方では買手と売手の関係が存在する。賃銀が支払われ、職人及び徒弟は自由な人格として対立する」(マルクス, 前掲「諸結果」, 195ページ, 傍点は筆者)。
- 38) Marx, K., a. a. O., *Werke*, 6, S. 412. 訳[6], 408ページ。
- 39) マルクス, 前掲「諸結果」, 164ページ。
- 40) Marx, K., a. a. O., *Werke*, 6, S. 410. 訳[6], 406ページ。
- 41) マルクス, 前掲「諸結果」, 144ページ。マルクスはこうした点に関してより具体的に剰余価値学説史の中で次のように述べている。「労働者は労働を遂行するが、しかし、それは資本に属し、ただ資本の1機

能にすぎない。それゆえ、その労働は直接に資本の監督と指揮のもとで行われ、それが対象化される生産物は、資本がそれとなって現われるところの、……新しい姿態である。それゆえ、労働は、すでに第1の取引によって形態的には資本に合体されたのちに、この過程において、直接に対象化され、直接に資本に転化するのである。しかもここでは、以前に労働能力の購入に投ぜられた資本よりも多くの労働が資本に転化する。この過程では不払労働の1部分が取得されるのであって、ただこのことによるのみ貨幣は資本に転化するのである」(Marx, K., *Theorien über der Mehrwert*, 1861~1863, Bd. I, *Werke*, Bd. 26/1, S. 374. 訳[26]-1, 507ページ)。

- 42) *Das Kapital*, I, S. 593. 訳[1]-b, 739ページ。この点に関してはマルクスは別なところでも次のように述べている。「資本主義的生産過程は、資本家が一部を市場に供給し一部を労働過程自身内に保有する価値或は商品の資本への転化であるばかりでなく、資本に転化されるこの生産物は、資本家の生産物ではなく、労働者の生産物である。資本家は、常に彼の生産物の一部—必要な生活手段—を労働に対して労働者に売る、買手自身の、すなわち労働能力の維持及び増大のために。そして常に彼の生産物の他の一部、客観的労働諸条件を、資本の自己増殖の手段として、資本として労働者に貸しつける。労働者がこうして彼の生産物を資本として再生産する間に、資本家は労働者を、賃銀労働者として、それ故にまた労働の売手として再生産する」(マルクス, 前掲「諸結果」, 239ページ)。
- 43) マルクス, 前掲「諸結果」, 239ページ。
- 44) *Das Kapital*, I, S. 595~596. 訳[I]-b, 742~743ページ。この点に関してマルクスはさらにより詳しく次のように述べている。「労働者階級の個人的消費は、資本によって労働力と引き換えに手放された生活手段の、資本によって新たに搾取されうる労働力への再転化である。それは、資本家にとって最も不可欠な生産手段である労働者そのものの生産であり、再生産である。……労働者階級の不断の維持と再生産も、やはり資本の再生産のための恒常的な条件である」(*Das Kapital*, I, S. 597~598. 訳[1]-b, 745ページ)。
- 45) *Das Kapital*, I, S. 647. 訳[I]-b, 808ページ。
- 46) *Das Kapital*, I, S. 611. 訳[1]-b, 762ページ。
- 47) マルクス, 前掲「諸結果」, 163ページ。労賃範疇の重要性についてマルクスは次のように述べている。「賃銀労働または賃銀制(Salariat)は、従って資本主義的生産にとって必然的な労働の社会的形態である、あたかも自乗された価値である資本が、労働を賃銀労働たらしめるためにその対象的条件のとらなければならない必然的な社会形態であるとまったく同様である」(マルクス, 前掲「諸結果」, 163~164ページ, 傍点は筆者)。
- 48) 最近、『資本論』体系に占める労賃論の位置付けをも含めて、労賃論の内容それ自体を再検討しようとする試みが出てきているが、さしあたっては平野厚生「『商品の物神性』について—労賃論との関連を中心として—」(東北大『研究年報経済学』, 1975, Vol. 37, No. 3), および若森章孝「『経済学批判要綱』における労賃論」(『経済論集』21巻4号, 関西大学経済学部, 1971年12月)をあげておこう。なお、私もこの点に関して次の個所で若干の私見を述べておいた。前掲『マルクス経済学』, 51ページ。
- 49) エンゲルスは、マルクスの『経済学批判』に対する書評の中で、マルクスの歴史的及び論理的展開の方法について次のように述べている。「論理的取扱いは……は、実際は、歴史的形態と攪乱的な偶然事とを除き去った歴史的取扱いにほかならない。この歴史が始まる場所から、同じく思考の行程も始らなければならない。そしてそれ以後の進行は、抽象的な、そして理論的に一貫した形式における、歴史的経過の映像にほかならないであろう。つまりそれは修正された映像であるが、しかし修正といっても、われわれはそれぞれの契機を、それが十分に成熟し典型的形態をもつにいたった発展時点で考察しうるのであるから、現実の歴史的経過そのものがあたえるところの諸法則にしたがって修正されているのである」(Engels, F., *Karl Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, 1895, *Werke*, Bd. 13, S. 475. 訳[13], 477ページ)。なお、この点に関しては見田石介『資本論の方法』(弘文堂, 1963年7月), および拙稿「マルクス経済学の対象, 課題, 方法」(前掲『マルクス経済学』所収「序章」)を参照されたい。さらにこの点についての詳しい検討は他日を期したい。
- 50) マルクス, 前掲「諸結果」, 240ページ。 (1976. 10. 31)